

梁瀬遺跡発掘調査報告

2004(平成16)年 3月

三重県埋蔵文化財センター



采瀬遺跡調査区全景（北上空から）

序

昭和63年度から始まった一般国道23号の歩道路整備に伴う発掘調査も本年度で16年度を迎えます。その間、多くの遺物を調査してまいりましたが、考古学上の貴重な発見が数多くありました。

本番で、報告いたします桜瀬遺物は、津内野に所在する遺物ですが、平成10年度の発掘調査によって平安時代の竈道が発見されました。この竈道は京の都から津勢村宮に通じる竈道の可能性があるものですが、歩道路整備に伴う発掘調査で、竈道が発見されたのも何か運命的な所縁を感じます。

現場での発掘調査が終了し、ようやくこの報告書を皆様の手許にお届けすることになりました。調査の成果が、学校教育や生涯学習、あるいは地域の文化振興にお役に立つことができますよう、今後は、積極的に公開普及活動に取り組むことが私の責務だと考えております。

またになりましたが、調査にあたりましては、多岐を連する津内野整備員三野河川歩道事務所、たき法入り部会、津内教育委員会、そして津内の皆様からはあたたかいご理解とご支援、ご協力を賜りました。みから御礼申し上げます。

平成16年 3月

三野界隈文化センター

所長 吉 六 典 夫

例 言

1. 本書は三重県津市野田字津東に所在する既述遺跡（津市遺跡番号848）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は三重県教育委員会が2003年度より部洲の整備員（2003年度12月～2004年度3月）から発掘を受け発掘したもので、2003年度8月～2004年度9月に発掘調査（発掘）を、2004年度10月に本遺跡を調査した。11月に発掘調査終了後、13・14年度は発掘調査を行った。遺跡にかかる年月は、2003年度より部洲の整備員の発掘状況によるものである。
3. 遺跡の名称は「発掘」の通りである。
 - ・遺跡名称 三重県教育委員会
 - ・遺跡管理 三重県建設文化センター
 - ・遺跡保存 津市教育委員会
 - ・発掘作業 発掘員（部洲整備員）
4. 発掘中の発掘調査の発掘者は、第1期（2003年度）の発掘調査は野田氏、第2期（2004年度）の発掘調査は矢野氏、本遺跡は野田氏と野田氏である。遺跡調査は、発掘者のほかに津市教育委員会が従事した。
5. 本遺跡にかかる発掘調査者は、野田氏（現 三重県立津市南高等学校）、野田氏（現 津市教育委員会）、矢野氏（現 津市教育委員会）、矢野氏（現 津市教育委員会）、矢野氏（現 津市教育委員会）、川合氏（現 津市教育委員会）、津市教育委員会である。発掘については、野田氏および矢野氏にその氏名を記した。遺跡の発掘調査は、野田氏が担当した。
6. 発掘調査にあたっては、野田氏（三重大学）、野田氏（三重大学）からご指導、ご協力を得た。
7. 既述遺跡の発掘調査については、「発掘」の図版的、その一部が既に公表されている。本報告では、これらの中で既に報告されている内容については、その趣旨を損なわない程度に追加修正し、さらに本発掘の取組を追加した上で、全体を編集した。
 - 『発掘調査報告書 遺跡文化センター発掘調査 IX（三重県建設文化センター 1997）
 - 『発掘調査報告書 遺跡文化センター発掘調査 X（三重県建設文化センター 1998）
 - 『発掘調査報告書 遺跡文化センター発掘調査 XI（三重県建設文化センター 1999）
 - 『発掘調査報告書ニュース』No.34（三重県建設文化センター 1999）
8. 遺跡調査、発掘調査は、本報告書掲載にあたりトレースをしているものもあるため、四期報告とは若干異なっている場合がある。
9. 本報告に用いた発掘および遺跡調査は、本遺跡の第VI期調査を基準とし、発掘の中心は全て発掘を示している。なお、本遺跡周辺の発掘は2003年度6月～2004年度6月、発掘からN6°40'W傾いている。
10. 本報告で報告した発掘調査、発掘および発掘調査は、三重県建設文化センターで保管・管理している。
11. 本報告に用いた遺跡表示および発掘調査の略記号は、「発掘」とおりである。
 - SB: 発掘調査
 - SD: 遺
 - SE: 発掘
 - SK: 遺
 - SR: 遺
 - Pit: 発掘・発掘
 - G: 発掘調査グリッド
 - T: 発掘調査トレンチ
12. 遺跡番号は遺跡の種類別に1から順に付す（例: SK1, SK2, SK3..., SD1, SD2, SD3...）、ピットについてはグリッド年別に1から順に番号を付した。なお、遺跡の名称、番号は遺跡番号および発掘調査ニュースでの名称とは異なっている。

本文目次

序	
目次	
目次	
I 序言	
1 オート道路法と意識の財取獲	(川合三平) 1
2 量子の起源	(川合三平・河津高集) 1
3 量子確証量子の起源	(大野心之) 2
4 量子の起源	(大野心之) 2
5 量子定数の方法	(河津高集) 2
II 思考と果敢	
1 思想的果敢	(川合三平) 3
2 思想的果敢	(河津高集・村ノ一・菅野陽子) 3
(1) 果敢の進歩 3
(2) 文意 3
(3) 言意 4
(4) 近世以降の果敢の果敢 4
III 量子確証量子	
1 第1回目の量子確証量子	(菅野陽子) 5
2 第2回目の量子確証量子	(大野心之) 5
IV 量子	
1 量子	(菅野陽子・河津高集) 7
2 量子	(菅野陽子・村ノ一) 8
3 量子	(村ノ一・菅野陽子・河津高集) 14
4 量子の量子代定	(ハリノ・サーヴェイ株式会社) 19
V 結論	(村ノ一) 21

挿図目次

第1号	通称記号等	4
第2号	第1号記号確認用字等	5
第3号	第2号記号確認用字トレンチ記号等	6
第4号	第2号記号確認用字3号通称略号	6
第5号	通称記号等	6
第6号	通称記号等および通称記号等	7
第7号	通称記号等	9
第8号	通称記号等	11~12
第9号	通称記号等および通称記号等	13
第10号	通称記号等(1)	15
第11号	通称記号等(2)	16

挿表目次

第1号	記号確認用字	5
第2号	通称記号	10
第3号	通称記号	10
第4号	通称記号	17
第5号	通称記号等	20
第6号	通称記号	20

図版目次

PL1	記号確認用G19、記号確認Aトレンチ用3・4	25
PL2	通称記号等・通称記号等	26
PL3	通称記号等	27
PL4	SB1、SB2	28
PL5	SE1、SE1の略号	29
PL6	SR1、SD1・2	30
PL7	SR1、SD2・3等記号、SD9	31
PL8	SD11、SK30	32
PL9	SE1、SK6~10、SK11~14・18~21	33
PL10	通称記号等、通称記号等	34
PL11	通称記号	35
PL12	通称記号	36
PL13	通称記号	37

I 前言

1 中勢道路建設と埋蔵文化財保護

中勢道路は、鈴鹿市三郷町から一志郡三芳町に至る延長33.8kmの一郷道23号のバイパスである。この道路は、鈴鹿市・伊賀郡・津市・久居市・富田郡・三芳町を通り、国道23号の西側とバイパス東側の道の間を南北を走り、中勢道の経済発展に寄与することを目的に計画されたものである。

道路計画中に所在する遺産や旧跡については、昭和58年に計走路域内の発掘調査を行い、美濃守り部洲の発掘調査と三重県教育委員会が遺産や旧跡の取り残れについて協議を行った結果、現状保存が可能な遺跡については発掘調査を実施し、現状保存をすることとなった。

調査は、美濃守り部洲の発掘調査から三重県が委託を受け、昭和63年度は三重県教育委員会中心、平成6年度からは三重県発掘センターが調査を担当している。また、現場作業は調査の準備を進めて、美濃守り部洲の発掘調査法により部洲発掘協会に委託している。そして、調査事業の実績にあたっては、美濃守り部洲の発掘調査・三重県・中部発掘協会の三者で「遺産や旧跡発掘調査協定書」を締結し発表を相違している。

その傍、発表計書の進展に合わせて、平成3年10月31日だけで、美濃守り部洲の発掘調査・三重県・中部発掘協会の三者で「発掘協定書(第1号)」を、平成5年9月7日だけで「発掘協定書(第2号)」を、平成10年3月31日だけで「発掘協定書(第3号)」を締結し、道路整備事業との調整を行った。また、平成11年3月31日だけで、初めて「遺産や旧跡発掘調査協定書」(平成11年4月1日～平成16年3月31日)を締結し、11年度以降の発表を相違している。

(川合喜子)

2 調査の体制

道路工事の現場調査と整理、報告書作成年度の調査体制は以下のとおりである。なお、調査にあたっては「県教育委員会・内閣府教育委員会職員と県と協議協議」に基づき、津内教育委員会及び鈴鹿内教育委員会から職員の出張を受けている。

(平成8年度)

中部美濃守り部洲第二課長 古原 寿

第三係長 小笠原 之

主任 菅原 陽子、小笠原 之

技 師 六橋公直

主任 津宮裕行、久保 之 (津内教育委員会から派遣)

菅原 壽 (鈴鹿内教育委員会から派遣)

調査補助員 大野 智代、杉崎洋子、沼田 三郎

リポート、津宮裕代、森崎 正

フクログ

主任 佐藤 久、川崎 敏子、久保 之

主任 森川 誠、鈴木 功、田中 由子

主任 菅原 壽、小笠原 之、久保 之

(平成9年度)

中部美濃守り部洲第二課長 古原 寿

主任 第三係長 小笠原 之

主任 菅原 陽子

技 師 丸山 文彦、六橋公直

主任 津宮裕行、久保 之 (津内教育委員会から派遣)

菅原 壽 (鈴鹿内教育委員会から派遣)

調査補助員 リポート、津宮裕代、津田口 敏子

沼田 三郎、フクログ

主任 佐藤 久、川崎 敏子、久保 之

主任 森川 誠、鈴木 功、田中 由子

主任 菅原 壽、小笠原 之、久保 之

(平成10年度)

中部美濃守り部洲第二課長 古原 壽

主任 第三係長 小笠原 之

主任 菅原 陽子

技 師 丸山 文彦

主任 鈴木 功、田中 由子 (津内教育委員会から派遣)

調査補助員 津宮裕代、津田口 敏子、丸山 文彦

主任 佐藤 久、川崎 敏子、久保 之

主任 森川 誠、鈴木 功、田中 由子

主任 菅原 壽

(平成11年度)

主任調査員 第二課長 吉内 典夫
主任調査員 三谷 忠之
技 師 川村 紀子
主任調査員 三谷 忠之 (津市教育委員会から派遣)
調査員 小林 裕之、丸尾 智広
主任調査員 西川 敏子、黒川 敬子、木下 裕子
主任調査員 森川 研代、三谷 忠之、高田 やよい
主任調査員 倉田 紀子

(平成13年度)

主任調査員 第二課長 新井 洋
主任調査員 三谷 忠之
主任調査員 川合 三子、黒川 明、又 敬義
技 師 川村 紀子
調査員 川崎 弘之、藤野 孝太郎
調査員 丸尾 智広
主任調査員 黒川 敬子、木下 裕子、森川 研代
主任調査員 高田 やよい、倉田 紀子

(平成14年度)

調査員グループ

グループリーダー 主任 三谷 忠之
主任 西川 敏夫
主任 高田 陽子
主任 又 敬義
技 師 高田 忠志、三谷 忠之
調査員 川崎 弘之、丸尾 智広
主任調査員 黒川 敬子、木下 裕子、森川 研代
主任調査員 高田 やよい、倉田 紀子
(川合 三子・西川 敏夫)

3 範囲確認調査の経過

従来調査は、全町調査の端角を受けて平成8・9年度に範囲確認調査が行われた。

第1回目の範囲確認調査は、平成8年11月12日から12月18日に実施した。グリッドを30箇所までとし、面積は474㎡であった。調査の端角、道幅はなく道の幅もきわめて少なかったことから調査の必要なしと判断した。

しかし、その後の調査で旧道の道路が旧歩道を横切るかたちで通っている状態がでてきたため、

トレンチ掘りにより旧歩道確認を行うこととした。第2回目の範囲確認調査は、平成9年10月13日から21日に実施した。旧歩道の道路が旧歩道であったので、旧歩道に掘りしたトレンチの端角を端角と見直し調査した。面積は678㎡であった。調査の端角、道路と見える道幅が確認され、その面積は3,620㎡の調査が実施であると判断した。

(三谷 忠之)

4 本調査の経過

従来調査の調査区には約4,000㎡の調査区があり、調査に気づいてそれを修正する必要があった。修正には意図に当りがかり、現場調査開始は平成10年11月16日になった。しかし、作業員が増員されたこと、道幅があまり狭くなかったことなどから調査は順調に進み、平成～調査時代の道幅・道幅を確認した。道幅測定は歩道測定で平成11年1月28日に実施し、その作業については平成11年度におこなった。

(三谷 忠之)

5 調査記録の方法

道幅測定は、1/50で歩道測定を行い、歩道幅は、道幅と、道幅と5cmコンター、道幅と5cmコンターと端角の3種別を作成した。

調査区のごく狭い歩道は1/20で歩道幅を測定した。歩道幅の幅測定は1/20で歩道幅を測定した。

歩道幅は4×4mを1グリッドとした。歩道幅は、又歩道幅は道路センター線をNラインとし、歩道幅からA、B、C、……と番号をだし、歩道幅は歩道幅から1、2、3……と番号をだした。

道幅の測定記録については、カメラは4×5インチ型、6×9cm型、35mm型を併用し、フィルムは、黒黒及びカラーリバーサルを併用した。

(西川 敏夫)

II 位置と環境

1 地理的環境

紀伊半島の東部に位置する三重県は、中央に長く約180kmに及ぶ、伊勢湾に注いだ伊勢・志摩両半島は、北に宍粟半島・鈴鹿半島が連なり、近江沖の伊賀沖のとの連携をなし、又は伊勢湾や太平洋に面する。伊勢湾に注いだ半島には多くの河川によって形成された中央約90kmに及ぶ広大な伊勢平野が広がり、琵琶湖の所在する津市は、この平野のほぼ中央部に位置する。

津市は、主に半島の志摩半島川流域、中央部の安濃川および宍粟川流域、南部の美濃川流域からなる。津市の中央部を流れる安濃川は、鈴鹿山脈の一つ駕尾ヶ岳にその源を発し、東向きに発達した谷津や下谷に沿って東流して伊勢湾に注ぐ。安濃川や宍粟川の流域には伊勢川により形成された平坦な平野が広がり、これを基盤にして早くから人が集えてきた。

琵琶湖(1)は、前述の宍粟川流域右岸の宍粟川と志摩のおごえ川に挟まれた伊勢湾に位置する。琵琶湖を形成した湖盆は、行政上は津市野上町域内に所在し、現状は入りである。湖深は5.2~5.8m程度で、湖形は北側の野上集落から東側のおごえ川にゆかい次第に広がる。

(川合正三・菅野隆功)

2 歴史的環境

(1) 縄文の遺跡

安濃川右岸の平野には様々な時代にわたる多くの遺跡が確認されており、その一部は琵琶湖平野も形成されている。室津城の縄文時代の代表的な遺跡については、既述の伊勢湾の報告書に記されているので、それらを参照していただきたい。ここでは、琵琶湖遺跡の縄文時代と湖盆の形成のある代から縄文時代にかけての縄文の遺跡についてのみ概観しておきたい。なお、湖盆の遺跡の範囲については確定しがたいものもあるため、おおよその位置と範囲を示している。

安濃川と宍粟川に挟まれた平野部には、縄文遺跡、

武ノ浦遺跡、萩ノ遺跡、笠作遺跡、伊戸遺跡が密集して所在している。宍粟川を挟んで琵琶湖の右岸に位置する伊戸遺跡(2)では、縄文の土器が多岐検出され、また遺物も縄文や大正の器や茶碗が検出されている。武ノ浦遺跡(3)では、縄文時代前期から中期の文土器にあった壺と土器が検出されている。萩ノ遺跡(4)では、縄文時代前期の壺と土器が検出されており、特殊遺物としては縄文土器が検出されている。笠作遺跡(5)では壺と土器が検出され、また遺物としては「大甕」の器が検出されている。伊戸遺跡(6)では、縄文時代の壺と土器が検出されている。

安濃川右岸の伊戸遺跡(7)では、縄文時代の壺と土器が検出され、多量の土器も検出されている。萩ノ遺跡(8)では、縄文時代から縄文時代前期の文土器に近い壺と土器が検出されており、また「土甕」と呼ばれた土器が検出されていることから、近くに居所があったと考えられる。森ノ遺跡(9)では、縄文時代の壺と土器が検出されており、大正遺跡(10)や大正遺跡(11)でも縄文時代や縄文の遺物が検出されている。また前所遺跡(12)でも、縄文土器類では、縄文時代の土器類をはじめ、奈良~鎌倉時代の遺物が検出されている。

これらの遺跡から安濃川を中央に約3km離れた安濃川右岸に所在する伊戸遺跡・笠作遺跡・森ノ遺跡(13)は、見つかった大型壺と土器類や検出された土器から縄文と考えられている。

(2) 文土

津市の文土は、所有の文土資料である「民部所蔵文土」によると、縄文時代の伊賀、安濃川や宍粟川流域では文土層が検出されていることがわかる。宍粟川右岸の一部には文土層が検出されており、これらの伊賀郡の文土の方位はN30°Eと考えられている。

文土層の遺物としては、前述の萩ノ遺跡の縄文時代から縄文時代前期の壺と土器が文土層に近いものであり、また、武ノ浦遺跡の縄文時代前期

から、期の地盤埋積層が文々、ちちにあることが確認されている。

(3) 古道

安瀬川付近には、平安京から伊勢国宮にちかう古道が通っていた。近江よから伊勢よへは、はじめに尾州にちてから加太越えをしていたが、仁和2 (886) 年に伊勢道が新たに開甲され陸路を運ることになった。古道には30哩 (約16km) ごとに駅家が考かれており、『延喜式』によると、伊勢国宮にちかう古道には陸路、西村、海路、皮余の各駅があつたとされている。伊勢国宮にちかうには聖徳太子が近が想定とされている陸路で東海道からちかれて西村駅をとおり、松坂西村が想定とされている海路駅にちかっていた。西村駅の所在地については高瀬があり、津内陸路のちる陸路 (14) や安瀬川が法面の木西村が近が有りと考えられている。西村駅から東へは、野々原から東側の谷をちけて久島にちる経路や、また野々原から又にかいび下陸路定部をちり後ちが近で東にちる経路が考えられている。安瀬道はちようどの又にちかうコースにあたる。

古道の遺構には、安瀬道のちち約1kmの安

瀬川ち岸にある東述のちち道で検目された各代時代の甲斐のある道SR1・2、あるいは茅野に所在する然道道の道路状況などがある。

(宮内省・河内系)

(4) 近世以降の野々原

現在の茅野は近世においては野々原であるが、その前は、伊勢より陸路 (尾州) (1594) には「野々原」として2045.36と記されている。長安郡では「野々原」で2046.394、尾州郡 (1700) で2046.394、尾州郡 (1834) で2053.444とある。

『室町』には寛延 (1748~1751) 年に家数170、戸数806、丁45と記されている。

近代にちつて明治5 (1872) 年の村界図年には、戸数155、戸数779、丁1、丁35と記されている。

なお、近世以降は現在の野々原とちちほぼ同様していると考えられる。

(河内系)



第1図 遺跡位置図 (1:50,000)

Ⅲ 範囲確認調査

1 第1回目の範囲確認調査

第1回目の範囲確認調査は、界道家所・伊福備中湯減の跡及び中沢の計9箇所センター枠No.1053～1065の中心から約240mの円で実施した。範囲確認調査は道路センターと又丸み沢の道路幅が近くに概ね20mピッチで30箇所選定した。各グリッドの位置については、センター枠が近のものをC、道路又丸み沢が近のものをE、道路丸み沢が近のものをWで示した。

調査の結果、G1・G13で溝、G1で溝・ビット、G19で河道と想定される粘土層と砂層の層を検出した。

G1の溝からの日ご遺物は無い。G11からは茶碗が日ごしているが、溝またはビットからの日ご遺物ではなく、溝またはビットも明確な遺物とは言いがたい。G13からは土師器の遺物があるが、土師器はかなり磨滅を受けており、溝からの日ご遺物もない。

G19の河道と想定される砂層からは、土師器が日ごした。この層の範囲を確認するためにG19から溝・又・中沢の3方向にトレンチを約1m幅で入れた。その結果、この層は中沢で表層の中心から1.6mまで続くことが判明した。溝と又丸みのトレンチでは範囲が日ごすることも明らかになった。粘土層と砂層の層は、流れによる堆積と考えられ、日ごした土師器は磨滅を受けており、流れ込みによるものと考えられる。

(調査場所：伊福備中)

2 第2回目の範囲確認調査

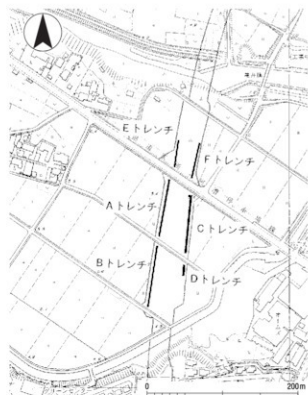
第2回目の範囲確認調査は、想定されている道路の位置の範囲をさらに詳しくとして、路縁の又丸み沢に幅2mのトレンチを中沢方向に6箇所選定した。なお、Dトレンチ幅の幅は1m幅程度で造成されており、溝が日ごしていたため調査は行わなかった。また、界道家所・伊福備中湯減の中沢をその対象範囲としたが、調査の進展に伴い界道家所にも遺物の層がある可能性があったため、その部分も合わせて調査を行った。



第2図 第1回範囲確認調査坑位置図 (1:5,000)

No.	位置	遺構	遺物
G1	1053W	溝	
G2	1053C		
G3	1053E		
G4	1054W		
G5	1054C		
G6	1054E		
G7	1054+18C		
G8	1054+18E		
G9	1056+17W		山茶碗
G10	1056+4C		
G11	1057W	溝、ビット	山茶碗
G12	1057E		
G13	1058W	溝	土師器
G14	1058E		
G15	1059W		
G16	1059E		
G17	1059+18C		
G18	1060E		
G19	1061W	河道	弥生土器
G20	1061C		
G21	1061+17E		
G22	1062W		
G23	1062C		石鏝
G24	1062E		土師器
G25	1063W		
G26	1063C		
G27	1063+17C		
G28	1064C		近世陶器
G29	1063+15W		
G30	1065+3W		近世陶器

第1表 範囲確認坑一覧表



第3図 第2回範囲確認調査トレンチ位置図 (1:5,000)

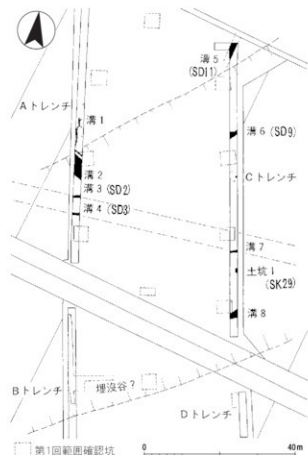
Aトレンチ等とCトレンチ全線で溝・トンネル・ピットが確認された。遺構は片側のみで検出され、遺物と倉庫は発見しない。Aトレンチの溝3・4は、断面逆V形で深さ約1.5m、底面が平らであると判断した。Cトレンチの溝5は幅1.6m、深さ0.8m、断面逆V形の溝であり、平安時代末期の茶碗が埋まっている。

B・Dトレンチでは、明確な遺構は確認されず、遺物も検出していないが、第1回範囲確認調査のG19や隣近の土層の状況から断面から推定するにA・B・Cトレンチを横切る幅60mほどの埋没谷あるいは凹道が存在する可能性があるかと判断した。

E・Fトレンチでは、埋没路と思われる溝1及び溝2は遺構・遺物とも認められない。

以上の結果、界逆断面のA・Bトレンチその隣近の幅約80mの範囲で遺構が確認された。この範囲と埋没谷あるいは凹道の確認も含めた約3,620m²についてが調査が必要であると判断した。

(大宮浩之)



第4図 第2回範囲確認調査主要遺構略図 (1:1,000)



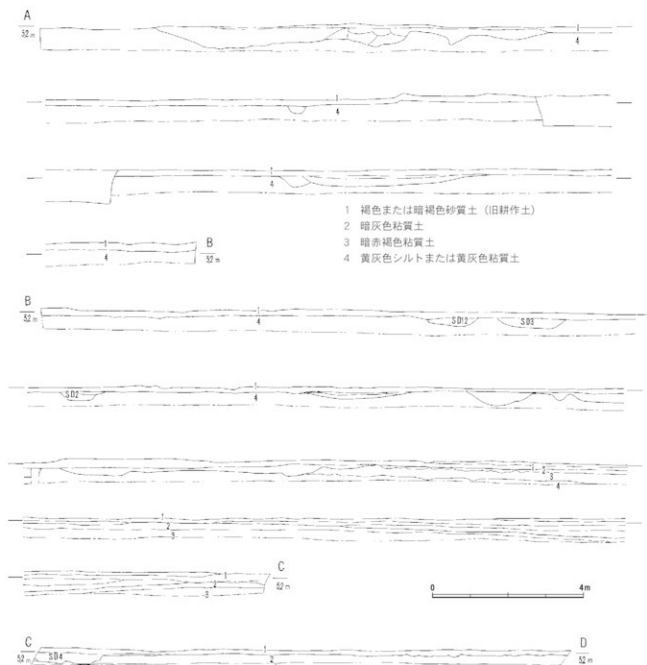
第5図 本調査区位置図 (1:5,000)

IV 本調査

1 土層

調査区の土層断面は、中層と表層で、層状に作成した。現地の断面は既に築きされており、現況断面での基本的な層序は、第1層が褐色または暗褐色粘質土（ワサ作土）、第2層が暗灰色粘質土、第3層が暗赤褐色粘質土、第4層が黄灰色シルトまたは黄灰色粘質土である。中層部では、第2層

と第3層は見られない。遺構は中層部では第3層より、中層部では第4層よりから入り込んでおり、この中で遺構検出を行った。なお、調査区中層および表層付近では甲がされているため、土層断面には示されていないが、部分的に土層が現存しているところもある。また岩戸川の改修によって部分的に埋没を受けており、中層部ではほぼ整齊による甲



第6図 調査区南壁および西壁土層断面図（1：100）

がえられた。

(宮野 陽次・伊藤高夫)

2 遺構

(1) 概況

検出した遺構は、塾ご柱梁的、ガサ、溝、道路状遺構、土床などで、当時は平安時代から鎌倉時代であるが、近世以降の土床も検出している。また瓦道等の遺構で平安時代の瓦道等の産片も検出している。

(宮野 陽次)

(2) 平安時代の遺構

瓦道

瓦道等の遺構では、瓦道の産片を確認した。掘削の増殖した状況を観察したところ、瓦道の付近にはもともと大きな谷があり、瓦道はこの部分を流れており、遺構の瓦を流れるおごえ川のかつての流路と考えられる。遺構では遺物は見つけていないが、平成8年度の第1期考古学調査で土器が検出している。

(杉本 亨)

(3) 平安時代から鎌倉時代の遺構

①塾ご柱梁的

遺構の中にはピットが埋りする部分もあったが、塾ご柱梁的として確認できたものは2棟のみである。

SB1 土床が遺構を包み込むため、全体の規模はわからない。4間×1間以上で、梁的の幅は道路状遺構SR1の幅とほぼ同じである。桁行きは9mで、柱間は2.25mすなわち7尺5寸若間である。梁行きは、1間分しか確認できなかったが、これも柱間は2.25mである。柱穴はいずれも方形で、総柱梁的になると考えられる。柱穴の深さは、床高である。同じ遺物がまったくないため当時は下甲であるが、形態的にはSB2より新しく、平安時代以降のものと考えられる。

SB2 遺物のほぼすべてを確認した3間×1間の瓦気風の塾ご柱梁的で、梁的の幅は、瓦気帯りの幅とほぼ同じである。桁行きは7mで柱間は下甲である。梁行きは、4.5mすなわち15尺であるが、土床は2間で、土柱の柱穴が浅く検出できなかったものであろう。柱穴の深さは床高である。

同じ遺物は、伊儀の産片であるが、平安時代のものと考えられる。

②ガサ

SE1 塾形は直径1.7mの円形で、深さは1.2mのガサである。土床にはほとんどなく、底には約50cm厚のガサが1層敷き込まれていた。土床は、上部が硬質のガサの床高で、下部が硬質のガサの床高である。土器等の遺物が検出していないため、当時は下甲であるが、基本的にみてSB1に似ているものと考えられる。

③道路状遺構と溝

SR1・SD2・SD3 平成9年度の考古学調査で瓦が明らかになったものであるが、遺構の瓦層から約20mにわたって確認することができた。路床等はみられなかったが、瓦層には溝が埋められており、溝の幅は0.5m～1mで、溝の深さは約4mで、ほぼまっすぐに瓦に延びている。

遺構の瓦層部分が瓦にわたって埋められていることもあって、これ以上溝の向きを確認することはできなかったが、約10mにある長い土器SK31・32をこの溝SD2の向きとみれば、この遺構は緩やかに湾曲しながら延びていたと考えられることである。SR1の幅は瓦道の瓦気帯りの幅より約10%未満している。同じ遺物は少ないが、平安時代以降までは検出していたものと考えられる。

④溝

SD9 遺構のほとんどが検出されたもので、長さ27m以上、幅0.8～1.2m、深さ0.3～1.0mである。そこから伊儀梁、土床が検出している。

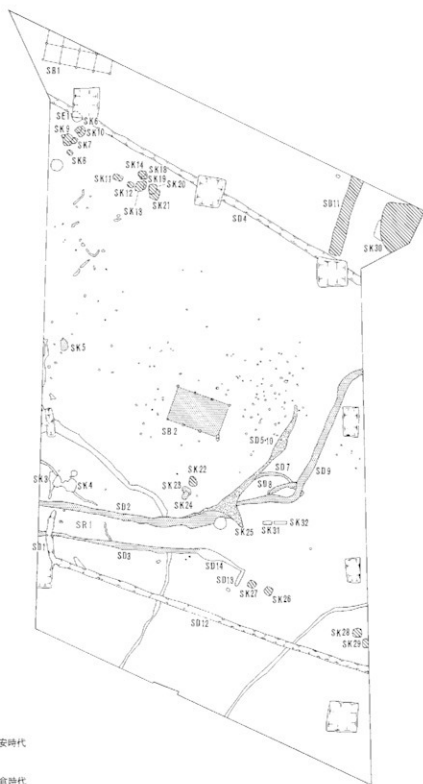
SD11 遺構の土床が検出されたもので、長さは11m以上、幅1.4～1.8m、深さ0.5～0.6mで、形状は逆V字である。ロクロ土器や土床が検出している。

⑤土床

土床は20以上に確認したが、土床の規模は第3期の土床と似ている。逆V字の形状のものも多く、遺構の土床に多くみられる。同じ遺物は少ないが、土床が検出しているものも多く、平安時代のものと考えられる。

(4) 近世の遺構

①溝



第7図 遺構配置図 (1:500)

遺構名	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	埋 土	時代	出 土 遺 物	備 考
SD1	7.5	0.8	0.2		近現代	土師器(10)、須恵器(13)、山茶桶(14)	
SD2	23 以上	0.5-1.0	0.1-0.2		平安		道路状遺構 SR1 の附属
SD3	21 以上	0.5-1.0	0.1-0.2		平安		道路状遺構 SR1 の附属
SD4	24.5 以上	0.9-1.2	-0.3		近現代		
SD5・10	20	0.4-1.3	0.1	黒灰色砂質土、黒灰色砂質土、黒灰色粘質土、青灰色粘質土	近世		
SD6				欠	番		
SD7	4.8	0.4-0.6	0.1	灰色粘質土	平安		
SD8	3.3	0.5-1.2	0.1		平安		
SD9	27	0.8-1.2	0.1-0.3	黒灰色粘質土、灰色砂質土	平安	土師器(17)、山茶桶(16)	横瀬番号 SD2
SD11	11 以上	1.4-1.8	0.5-0.6	灰色粘質土に暗褐色土層じり	鎌倉	口クロ土師器(18・19)、山茶桶(20・21)	横瀬番号 SD1
SD12	47 以上	0.8	0.1-0.2		現代		
SD13	2.4	0.5	0.2	灰色	不明		
SD14	6	0.4-1.4	0.1-0.2	黒灰色砂質土	不明		

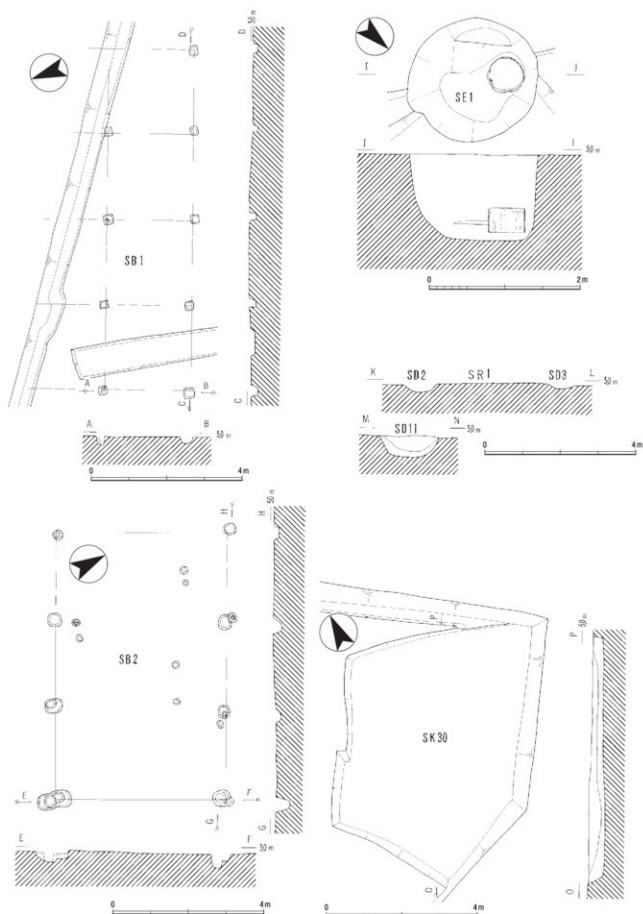
第2表 溝一覧表

遺構名	形態	平面規模 (m)	深さ (m)	埋土	時代	出土遺物	備考
SK1				欠	番		
SK2				欠	番		
SK3		3.5 × 0.6	0.2	黒灰色粘質土	不明		
SK4		3.2 × 1.6	0.1	濃黒灰色粘質土	不明		
SK5	不定形	1.7 × 1.0	0.2	黒灰色	平安		
SK6	方形	0.9 × 0.7	0.5	灰褐色土に黄色層じり	鎌倉		SK10 より新
SK7	不定形	1.8 × 1.2	0.2	灰褐色土に黄色層じり	鎌倉		SK9 より古
SK8	方形	1.0 × 0.8	0.8	灰褐色土に黄色層じり	鎌倉		
SK9	円形	径 1.0	0.4	灰褐色土	鎌倉		SK7 より新
SK10	方形	1.3 × 0.9	0.4	灰褐色土	鎌倉		SK6 より古
SK11	方形	1.3 × 0.8	0.2	灰褐色土に黄色層じり	鎌倉		
SK12	方形	0.8 × 0.7	0.2	灰褐色土に黄色層じり	鎌倉		
SK13	方形	1.3 × 1.1	0.5	灰褐色土に黄色層じり	鎌倉	山茶桶(11)	SK19 より新、横瀬番号 SK1
SK14	不定形	1.0 × 0.8	0.2	灰褐色土に黄色層じり	鎌倉		SK18 より新
SK15				欠	番		
SK16				欠	番		
SK17				欠	番		
SK18		1.0 × 0.8	0.2		鎌倉		SK14 より古
SK19	方形	1.0 × 0.6 以上	0.3	灰褐色土に黄色層じり	鎌倉		SK13 より古
SK20	方形	1.2 × 1.1	0.3	褐色粘質土に灰白色粘質土層じり	鎌倉	灰桶陶器(10)	SK21 より新、横瀬番号 SK2
SK21	方形	1.5 × 1.3	0.4	灰色粘質土に褐色粘質土層じり	鎌倉		SK20 より古
SK22	方形	1.3 × 1.0	0.2	褐色粘質土	不明		
SK23	楕円形	1.3 × 1.0	0.2	褐色粘質土	不明		SK24 より古
SK24	円形	径 0.8	0.8	灰色粘質土	不明		SK23 より新
SK25	不定形	3.0 × 1.5	0.2		近世		
SK26	方形	1.1 × 1.0	0.7	灰色に黄褐色層じり	鎌倉		
SK27	方形	1.1 × 1.1	0.7	灰色に黄褐色層じり	鎌倉		
SK28	円形	径 1.2	0.9	灰褐色	鎌倉		
SK29	円形?	径 1.2	0.8	灰褐色	鎌倉		一部調査区外
SK30	不定形	7.0 × 4.7 以上	0.4	暗褐色粘質土	鎌倉	土師器杯(12)、山茶桶(13・14)	調査時 SH1、横瀬番号 SK3
SK31	方形	1.1 × 0.5	0.1	褐色粘質土	平安?		SD の続きか?
SK32	方形	1.6 × 0.4	0.1	褐色粘質土	平安?		SD の続きか?

第3表 土坑一覧表



第8図 遺構平面図 (1:200)



第9図 個別遺構平面及び断面実測図 (SB1・2, SR1, SD2・3・11, SK30は1:100, SE1は1:50)

SD5・10がある。規模若については、第2巻に示した。

② 子牙

SK25がある。

(5) 近現代の遺物

清SD1・4・12がある。

(6) 当部下の遺物

清SD13・14、SK3・4・22～24がある。

(材メ- 李)

3 遺物

(1) 概説

縄文時代から近世にかけての遺物が豊富だが、遺物密度が低いうえに、遺物と土層もほとんどなかったため、遺物は少なく、土片が多い。縄文石器、土器、須臾器、乱石器、灰利器、土茶碗、土皿、近世の陶磁器類、製漆器、漆器、土物などが目立った。遺物の多くは土層から目立ったが、遺物からはおもに平安時代から鎌倉時代の遺物が目立った。

(材メ- 李)

(2) 縄文時代の遺物

① 石器

石斧 (1)

第1水輪字 須臾器 石斧 No.23目である。サヌカイト製の石斧で、長さ1.9cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、重さ0.8gである。

② 土器

縄文土器 (2～4)

(2・3)には突帯がみられる。(4)は? 腹部に溝をめぐらすもので、須臾器の類である。

(3) 平安時代の遺物

平安土器 (5)

第1水輪字 須臾器 土器 No.19から目立ったもので、口径19cmの? 皿の? である。頸部は直さし、? 縁は大きく外に突き、縁部? には手をもつ。? 縁? には? 内に輪状突起をもち、突起の? 部にへらで? をつくる。頸部には溝をめぐらし、溝と溝の間には? を穿す。? 縁部? にはタテウのハケメを、? 縁部? には? 突起を穿す。? 縁部? はヨコハケで調整する。

(4) 石代～石川の遺物

① SE1 日ノ遺物

土製品

土物 (6)

土物の? 等に使用されていたもので、? 縁に3つの溝をはめて、さらに? 縁と溝の間に3本の? を彫りにする。土物の口径は48.8cm、高さ34cmである。? 縁は径48cm、高さ34cm、厚さ0.5～0.7cmで、? 中には、幅0.5～1.0cmの? で? のケビキをいれる。? 縁は1? 5? 綴じで、? 縁の厚さは1.7cmである。

? 縁は、一番上のものは幅8.5cm前後、厚さは0.3～0.5cmである。? 縁は2? 所で行い、2? 前後3? 前後2? 綴じと1? 2? 綴じである。? 縁部の? 縁の厚さは0.6～0.7cmである。一番? の? 縁は幅8.7～9.3cm、厚さは0.3～0.5cmである。? 縁は2? 所で行い、2? 前後4? 前後2? 綴じと1? 3? 綴じである。? 縁部の? 縁の厚さは0.6cm程度である。一番? 、すなわち? 前後の? 縁は幅9.2～9.6cm、厚さは0.3～0.5cmである。? 縁は2? 所で行っているが、2? 前後? 前後3? 前後2? 綴じと1? 3? 綴じである。? 縁部の? 縁の厚さは0.4cmと0.7cmである。? 縁は、長さ33～34cm、厚さ0.3cm前後であり、幅は7cm、6.5cm、3.7cmとそれぞれ異なる。? 前後の? 縁には径0.5cmの? の? が15? 所みられ、? 縁まで貫通しており、このうち4? 所で? が残存する。? 縁部? 縁の? 縁ははずして、土物として使用したものと考えられる。

② 道路土遺物、? 縁部? 縁部遺物 (7～15)

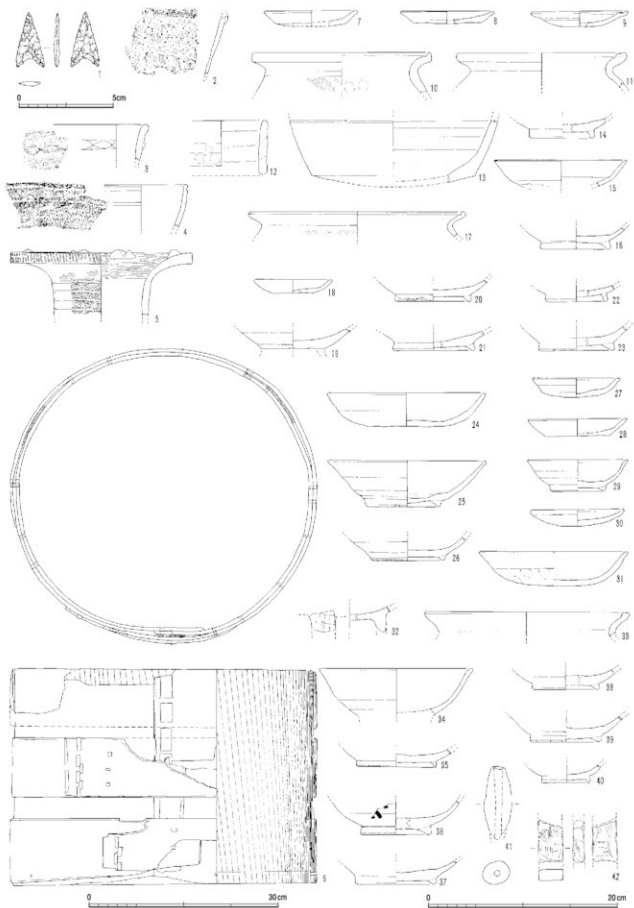
ア) SD2 (SR1? 日ノ遺物) 日ノ遺物 (10・11・13・14)

土器類、須臾器類、土茶碗が目立った。

土器類(10) ? 縁は「く」の字状に反し、縁部をつまみ上げる。頸部? 縁はハケ調整である。? 縁部の? 縁であるが、長円形になるものと思われる。須臾器 (13) 頸部から? 縁にかけての? 縁である。? 縁も口クロナデである。溝を穿す。口クロ? 縁は? 縁である。

土茶碗(14) 頸部? 縁である。? 縁は径6cmで、? 縁は「ハ」の字に開く。

イ) SR1の上? 日ノ遺物 (7～9・15)



第10図 出土物実測図(1) (1:4, ただし1・41は1:2, 6は1:6)

②伊模ナツ(7・8) 口径約10cm、底径約7cm、器高1.3~1.6cmである。底部から口縁部はヨコナデである。

③伊模ナツ(9) 想定口径10cm、器高1.7cmである。いわゆる「て」の字状口縁で、口縁部はヨコナデである。

④器(15) 想定口径14cmである。底部に母をもつて、口縁には浅減をもつ。口縁部には字跡がみられる。

③SD9Fに連竹

⑤伊模ナツ(17) 口縁部のナツである。口縁は「く」の字状に外反し、唇部をつまみ上げる。口縁にハケメが見られる

⑥茶碗(16) 底部~口縁部のみ残存する。口径は径6.8cmで、「ハ」の字に開く。

④SD11Fに連竹

⑦伊模ナツ(18) 想定口径8cm、想定底径4cm、器高1.3cmである。底部は平底で、口縁は唇縁的に開き、口縁部は浅い。

⑤伊模(19)

⑧茶碗(20・21) とともに底部から口縁部のみ残存する。口径は径8cm程度で、「ハ」の字状に開く。(20)には肩線痕が多く見られる。

⑥SK20Fに連竹

⑨丸形器(22) 底部が1/5程度残存するナツである。口径は器りだけ4cmで、断面は三日月形を呈する。片伊53号釜式であろう。

⑥SK13Fに連竹

⑩茶碗(23) 底部から口縁部のみ残存する。口径の想定口径は8cmで、「ハ」の字状に開く。

⑦SK30Fに連竹

⑪伊模ナツ(24) 想定口径17cm、器高3.1cmである。口縁部はヨコナデ、底部には丸型である。

⑫茶碗(25・26) (25)は口径16.7cm、器高5.1cmで、口径は(25・26)とも7cm程度である。口縁は唇縁的で、口径の断面は逆勾形である。

⑧ピットFに連竹(27~30)

P13~P14に連竹

⑬伊模ナツ(27) 口径9cm、器高2.2cmである。口縁部はヨコナデによって、やや外反し、唇部は浅く締まる。

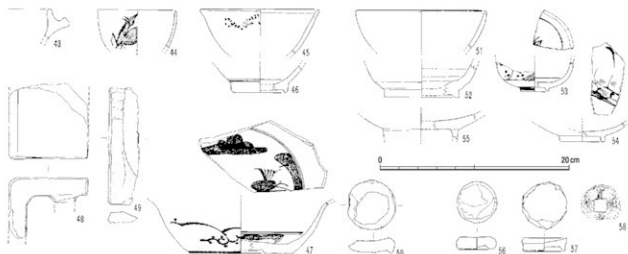
⑭口口伊模ナツ(28) 想定口径10cm、想定底径7cm、器高1.7cmである。底部は平底で、口縁は唇縁的に斜めに反り、口縁部は浅くおさめる。口口成形で、口縁部には浅い痕を残す。

⑮茶碗系ナツ(29) 想定口径11cm、器高3.4cm、想定口径径6cm弱である。口径は断面逆三角形で、口縁は浅減するが、口縁部でやや外反し、唇部は浅く締まる。

013~P12に連竹(30・31)

⑯伊模ナツ(30) 口径4.9cm、器高1.8cmである。口縁部は浅くおさめ、口縁部との境目は入甲である。口縁部はヨコナデである。

⑰伊模ナツ(31) 口径15.7cm、器高3.8cmである。



第11図 出土遺物実測図(2) (1:4, ただし50・56~58は1:2)

遺物 番号	発掘番号	出土遺物の位置 と深さ	遺物	口径(φ)cm	高さcm	重量kg	取付高の 寸法	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	01-01	龍洞編組No. 23	土器	高 2.9	幅 1.5	重量 0.6g		打製、凹線無蓋					オサカイト
2	01-02	013 包含層	縄文土器					突帯	磁、砂粒含み	やや軟	灰白	小片	
3	01-02	013 包含層	縄文土器					突帯	石粒含み	やや軟	灰白	口縁部小片	遺物番号 30
4	007-05	0K24	縄文土器残片					沈線	磁、砂粒含み	真	灰	口縁部小片	
5	01-01	龍洞編組許可河原	弥生土器等	19.2				沈線、縄文、割文、ハケム、縁状突起	石粒含み	真	灰	口縁部 1/3	
6	016-01	0R1	動物	0.8	3.0			動物ケビシ、漆、漆木					遺物番号 20
7	012-04	0R1 土層	土師器小皿	(0.7)				ヨコナデ、ナデ	石粒含み	真	灰白	1/5	遺物番号 21
8	012-06	0R1 土層	土師器小皿	(0.8)	1.3	(7.1)		ヨコナデ、オサエ	石粒含み	真	浅黄緑	2/3	遺物番号 22
9	012-03	0R1 土層	土師器小皿	(0.1)	1.7			ての字状口縁、ヨコナデ、ナデ	石粒含み	真	灰白	1/5	遺物番号 23
10	001-02	0D2	土師器壺	(0.3)				ヨコナデ、ハケム	石粒含み	真	灰白	口縁部小片	016、016副付1
11	013-07	0D2 土層	土師器壺	(17.8)				ヨコナデ	016、砂粒含	真	橙	口縁部 1/8	
12	012-05	0R1 土層	煎飯土器					ナデ、オサエ	磁、小石含み	硬	浅黄緑	縁部小片	
13	001-03	0D2	煎飯土器			(17.4)		沈線、ロクロナデ	漆	真	灰白	下平 1/6	016、016副付1
14	001-01	0D2	山菜類			06.2		ロクロナデ、突起付高台	漆	真	灰白	底部 1/3	遺物番号 3
15	012-01	0R1 土層	白磁 漆	(1.4)				内縁に沈線、ロクロナデ	漆	真	灰白	口縁部 1/8	016、016副付1
16	004-01	0D9	山菜類			06.8		ロクロナデ、突起付高台	砂粒含み	真	灰白	底部 1/2	遺物番号 4
17	004-02	0D9	土師器壺	(2.4)				ヨコナデ、ハケム	砂粒含み	真	灰白	口縁部小片	遺物番号 5
18	003-03	0D11	土師器小皿	(0.1)	1.3	(4.0)		ヨコナデ	砂粒含み	真	灰白	1/4	遺物番号 6
19	003-04	0D11	土師器小皿					ロクロナデ、突起付高台	砂粒含み	真	灰白	底部のみ	遺物番号 7
20	005-01	0D11	山菜類			(7.8)		ロクロナデ、突起付高台、刺線	砂粒含み	真	灰白	底部 2/3	遺物番号 9
21	005-02	0D11	山菜類			(8.3)		ロクロナデ、突起付高台	砂粒含み	真	灰白	1/3	遺物番号 8
22	007-01	0K20	煎飯土器類			06.0		ロクロナデ、突起付高台	漆	硬	灰白	底部 1/3	016、016副付1
23	007-04	0K13	山菜類			(7.8)		ロクロナデ、突起付高台、刺線	砂粒含み	真	灰白	底部 1/3	遺物番号 11
24	006-03	0K30	土師器杯	(16.7)	3.1			ヨコナデ、ナデ	砂粒含み	真	灰白	1/5	遺物番号 12
25	006-02	0K30	山菜類	16.7	5.1	7.4		ロクロナデ、突起付高台、刺線	砂粒含み	真	灰白	4/5	遺物番号 14
26	006-01	0K30	山菜類			7.2		ロクロナデ、突起付高台、刺線	砂粒含み	真	灰白	底部のみ	遺物番号 13
27	010-02	F13 F01	土師器小皿	9.0	2.3			ヨコナデ、ナデ、オサエ	砂粒含み	真	浅黄緑	全部	遺物番号 15
28	010-03	F13 F01	土師器小皿	(0.3)	1.7	06.9		ロクロナデ、突起付高台	砂粒含み	真	灰白	1/2	遺物番号 16
29	010-01	F13 F01	小皿	(0.0)	3.4	(6.6)		ロクロナデ、突起付高台	砂粒含み	真	灰白	1/5	遺物番号 17
30	009-01	013 F02	土師器小皿	3.8	1.8			砂粒含み	真	灰白	ほぼ全部	遺物番号 18	
31	009-02	013 F02	土師器杯	13.7	3.8			ヨコナデ、ナデ、オサエ	砂粒含み	真	灰白	ほぼ全部	遺物番号 19
32	013-05	N20 包含層	煎飯土器					ロクロナデ、ケズリ	砂粒含み	真	灰白	縁部小片	
33	014-01	013 包含層	土師器類	(21.7)				ヨコナデ	016、砂粒含	硬	灰白	口縁部 1/7	
34	013-04	N20 包含層	山菜類					ロクロナデ	漆	真	灰白	上平 1/4	
35	013-03	K20 包含層	山菜類			06.4		ロクロナデ、突起付高台	砂粒含み	真	灰白	底部のみ	
36	003-06	龍洞編組C区	山菜類			(7.2)		ロクロナデ、突起付高台	磁、砂粒含み	真	灰白	底部 1/5	016、016副付1
37	013-01	K17 包含層	山菜類			8.2		ロクロナデ、突起付高台	砂粒含み	真	灰白	底部のみ	
38	005-06	龍洞編組C区	山菜類			06.7		ロクロナデ、突起付高台	漆	真	灰白	底部 1/3	
39	013-02	K16 包含層	山菜類			7.1		ロクロナデ、突起付高台	砂粒含み	真	灰白	底部のみ	
40	014-06	N18 包含層	陶器類			4.9		ロクロナデ、削り出し高台	漆	真	灰白	底部	白磁類
41	014-03	K17 包含層	土器	高 3.8	幅 1.0	重量 5.1g			016、砂粒含	硬	灰白	一部欠損	
42	013-06	N18 包含層	帆石	残高 4.3	幅 2.6	厚 1.3		内面使用	砂粒			小片	
43	003-02	0D5	瓦管土器類					ナデ	漆	真	灰白	口縁部小片	
44	002-04	0D5	煎飯土器	(8.3)				ロクロナデ	漆	真	灰白	縁部 1/5	016
45	002-03	0D5	陶器類	(12.4)				ロクロナデ	漆	真	灰白	縁部 1/5	016
46	002-02	0D5	陶器類			(5.4)		ロクロナデ、削り出し高台	漆	真	灰白	底部 1/4	016
47	002-01	0D5	煎飯土器			(11.0)		ロクロナデ、削り出し高台	漆	真	灰白	縁部 1/5	016
48	003-01	0D5	瓦管製品					ナデ	真石含み	真	灰白	小片	
49	003-03	0D5	石製	残高 12.3								破片	
50	002-05	0D6	加工刀型	径 5.2	厚 1.3	重量 38.8g		陶器類高台部を加工	漆	硬	黄黒	ほぼ全部	
51	007-03	0K25	陶器類	(13.8)					漆	真	灰白	口縁部小片	
52	007-02	0K25	陶器類			(7.9)		ロクロナデ	漆	真	灰白	底部 1/8	016
53	008-02	0K25	陶器類			(5.1)		ロクロナデ、削り出し高台	漆	真	白	底部 1/4	016
54	008-01	0K25	陶器類			(4.7)		ロクロナデ、削り出し高台	漆	真	灰白	底部 1/2	016
55	001-04	0D2 段瓦	煎飯土器			(8.0)		ロクロナデ	漆	真	浅黄緑	底部 1/3	016
56	014-07	N17 包含層	加工刀型	径 3.1	厚 重量 13.6g			陶器類高台部を加工	漆	真	灰白	ほぼ全部	
57	014-04	N18 包含層	加工刀型	径 4.1	厚 重量 28.4g			陶器類高台部を加工	漆	真	灰白	ほぼ全部	
58	014-05	N17 包含層	陶器	径 2.3				漆木塗				一部欠損	

第4表 出土遺物一覧表

藏部はやや戻り、落部は大きく変わる。リ藏部はヨコナゲで調整する。各部には皆頭上飛が、甲線に残る。

④その年の遺物 (33~42)

33はコ宇留樽、34~39は茶碗である。36の赤部外には赤線がみられる。41の蓋と42の底は甲線な当代は下甲ではあるが、蓋裏面が最も甲線が濃いと判断して、ここで取り除いた。

(5) 近世の遺物

① SD 5丁 遺物 (43~50)

43は土製コ器結核、44は磁器碗である。45・46は陶器の碗であるが、45 - 結核の甲線がある。47は磁器鉢、48は土製の器、49は磁碗、50は加こり器である。

② SK25丁 遺物 (51~54)

いずれも陶器の碗である。

③ その年の遺物 (55~58)

55は甲線の派手な紋の磁器碗と考えられるもので、18世紀から19世紀の頭のものである。56・57は、加こり器で、陶器碗の裏面部分を転写したものである。58の底は寛永通宝である。

(川合三平、河合高丸)

4 放射性炭素年代測定

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

湖中に所在する炭源遺跡は岩手川も岸の江原県に位置する。遺跡よりでは、湖底層中に形成された沈路が確認されている。この沈路の形成過程は、軟ユニットに認められ、硬ユニットより沈路の形成が認められている。また、沈路により沈着された沈積物には有機質の炭種が確認されている。本報告では、沈路の形成、沈積までのプロセスを調査することを目的として、硬ユニットに認められた炭種について加速器による放射性炭素年代測定（AMS法）を実施し、その炭種年代に関する情報を得る。

1. 試料

試料は、炭源遺跡からトレンチ掘削の土層より採取された有機質の炭種2点（No. 1, 2）と木材片3点（No. 3～5）、爪道中継路の土層より採取された有機質の炭種1点（No. 6）と木材片2点（No. 7, 8）および遺跡からの土層から採取された炭種1点（No. 9）の合計9点である。

中継路トレンチ掘削における試料の層位関係は、上よりNo. 3, 4, 5, 1, 2の順であり、爪道中継路における試料の層位関係は、上よりNo. 8, 7, 6である。なお、木材片および炭種の種類については、測定結果を明示した表1に示す。

2. 分析方法

測定は株式会社加速器研究所を経て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の測定はLIB-BYの測定器、568pを視認する。また、測定年代は1950pを原点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、年代校正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を用いた。

3. 結果

結果を表1に示す。また、年代校正を行った年代を表2に示す。

中継路トレンチ掘削では、No. 1と2、No. 4と5のそれぞれの層位と測定年代（放射性炭素年代）との関係が認められるが、全体的には約4000p

から2800p年代までに至る年代の傾向が認められる。一方、爪道中継路の掘削では、層位と年代との関係は認められず、約3800p年から2400p年代までに至る年代が得られた。また、No. 9は約4000p年代の年代を示す。

ここで、これらの結果から推定される沈路の形成と炭種の年代について述べる。まず、沈路に沈着されている炭種については、有機質の炭種から4000p年代の年代が得られているが、これは、炭種の中に含まれる炭種が頭を培った炭種から得られた物であり、それが有機質の炭種年代を示すとは限らない。しかし、今回の場合、沈路下の木材片に3600p年代の年代を示すもの（No. 3）や3900p年代の年代を示す木材片が認められていることから、有機質の炭種が示す年代は、炭種年代からそれ程ずれていないと考えられる。すなわち、およそ4000p年代の炭種層を沈着して沈路が形成されている可能性がある。次に、沈路の形成年代については、中継路トレンチ掘削では2900～2800p年代、爪道中継路では2400p年代にそれぞれ考えられ、炭種は、その年代以降に進行したと言える。

今後、さらに年代測定を各種土層、層位との層位関係や遺跡・遺物の層位・年代層位などとの関係を調査することができれば、より確実な炭種年代の推定が期待される。

No.	採取地点	層位	試料の質	種類	補正年代 BP	± 1σ C (%)	測定年代 BP	Code No.
1	南北トレンチ 西壁	下位	有機質堆積物	—	4010 ± 40	-23.52	3990 ± 40	IAAA-31142
2		最下位	有機質堆積物	—	3910 ± 50	-20.15	3830 ± 40	IAAA-31143
3		最上位	生材	ムクロジ	2790 ± 40	-25.91	2800 ± 30	IAAA-31144
4		上位	生材	コナラ属/アカシヤ属	3670 ± 50	-29.30	3740 ± 40	IAAA-31145
5		中位	生材	キハダ	2920 ± 40	-22.95	2890 ± 40	IAAA-31146
6	農道南調査区西壁	下位	有機質堆積物	—	3800 ± 40	-19.37	3700 ± 40	IAAA-31147
7		中位	生材	クリ	2450 ± 40	-25.24	2460 ± 40	IAAA-31148
8		上位	生材	ムクロジ	2350 ± 40	-29.91	2430 ± 30	IAAA-31149
9	—	—	炭化材	イネ科タケ茎科	3950 ± 40	-22.92	3910 ± 40	IAAA-31150

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
 3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

第5表 放射性炭素年代測定結果

No.	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.
1	4009 ± 39	cal BC 2,570	-	cal BC 2,517	cal BP 4,520	-	4,467	0.666	IAAA-31142
		cal BC 2,500	-	cal BC 2,473	cal BP 4,450	-	4,423	0.334	
2	3913 ± 44	cal BC 2,467	-	cal BC 2,396	cal BP 4,417	-	4,346	0.609	IAAA-31143
		cal BC 2,388	-	cal BC 2,339	cal BP 4,338	-	4,289	0.373	
3	2789 ± 38	cal BC 2,317	-	cal BC 2,313	cal BP 4,267	-	4,263	0.018	IAAA-31144
		cal BC 997	-	cal BC 898	cal BP 2,947	-	2,848	1.000	
4	3665 ± 44	cal BC 2,135	-	cal BC 2,079	cal BP 4,085	-	4,029	0.415	IAAA-31145
		cal BC 2,055	-	cal BC 2,008	cal BP 4,005	-	3,958	0.341	
5	2919 ± 37	cal BC 2,002	-	cal BC 1,976	cal BP 3,952	-	3,926	0.210	IAAA-31146
		cal BC 1,969	-	cal BC 1,963	cal BP 3,919	-	3,913	0.034	
6	3796 ± 38	cal BC 1,209	-	cal BC 1,201	cal BP 3,159	-	3,151	0.045	IAAA-31147
		cal BC 1,190	-	cal BC 1,178	cal BP 3,140	-	3,128	0.092	
7	2452 ± 37	cal BC 1,161	-	cal BC 1,141	cal BP 3,111	-	3,091	0.134	IAAA-31148
		cal BC 1,131	-	cal BC 1,041	cal BP 3,081	-	2,991	0.707	
8	2347 ± 36	cal BC 1,028	-	cal BC 1,024	cal BP 2,978	-	2,974	0.022	IAAA-31149
		cal BC 2,288	-	cal BC 2,196	cal BP 4,238	-	4,146	0.816	
9	3947 ± 39	cal BC 2,167	-	cal BC 2,144	cal BP 4,117	-	4,094	0.184	IAAA-31150
		cal BC 758	-	cal BC 685	cal BP 2,708	-	2,635	0.361	
7	2452 ± 37	cal BC 660	-	cal BC 645	cal BP 2,610	-	2,595	0.072	IAAA-31148
		cal BC 586	-	cal BC 584	cal BP 2,536	-	2,534	0.008	
8	2347 ± 36	cal BC 543	-	cal BC 480	cal BP 2,493	-	2,430	0.310	IAAA-31149
		cal BC 468	-	cal BC 447	cal BP 2,418	-	2,397	0.100	
9	3947 ± 39	cal BC 443	-	cal BC 412	cal BP 2,393	-	2,362	0.148	IAAA-31150
		cal BC 483	-	cal BC 465	cal BP 2,433	-	2,415	0.137	
7	2452 ± 37	cal BC 450	-	cal BC 440	cal BP 2,400	-	2,390	0.059	IAAA-31149
		cal BC 426	-	cal BC 424	cal BP 2,376	-	2,374	0.010	
8	2347 ± 36	cal BC 413	-	cal BC 379	cal BP 2,363	-	2,329	0.794	IAAA-31149
		cal BC 2,550	-	cal BC 2,542	cal BP 4,500	-	4,492	0.057	
9	3947 ± 39	cal BC 2,490	-	cal BC 2,402	cal BP 4,440	-	4,352	0.760	IAAA-31150
		cal BC 2,376	-	cal BC 2,352	cal BP 4,326	-	4,302	0.182	

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

第6表 暦年較正結果

V 結語

1 遺跡の範囲

今期調査を行った部分は、埋没や埋積を受けていることもあるが、全体に遺構の露出が広いことから、遺跡の範囲部にあたるものと考えられる。付近の地形が丸みを帯びるおごえ川にちかかって広くなっていることからみると、この遺跡の範囲は調査よりもう少し奥のみにあるものと考えられる。

2 道路状遺構と古道

今期の調査では、道路状遺構SR1を約20mにわたって確認した。この遺構と重複したり、ほぼ並行の際に埋没を受けていたりしていることもあって、調査SD2・3の跡を調査の奥まで遡ることはできなかったが、調査SD2の延長線上にある延長約30m・幅3.1・3.2をこの遺構の跡とみれば、SR1はわずかに流石しながら奥へ続いていたと考えることもできる。SR1の有終期については、なお検討を要するが、同じ遺構から観察して土層については弥生時代以降で、土層についても弥生時代のなかでおさまるものと考えられる。

遺跡と集落の境で述べたとおり、調査遺跡の所在するおごえ川の右岸では、調査の奥側の野上集落が近からず、下流部を遡って海岸部の隆起付近にさがる丸みのある遺構が想定されている。今期、確認した道路状遺構SR1は弥生時代のものと考えられるが、これが想定されている遺構に相当するのかわかりずにはわからない。周辺の土層との関係など、幅広い範囲での検討が必要であろう。

3 条里方向と検出遺構の方位

道路状遺構SR1と条里線SB1・2との関係をみれば、SR1の約10m先にSB2が、約60m先にSB1がある。条里線のうち、SB2がSR1より10°傾斜するのに対して、SB1はSR1とほぼ同じ向きを示している。SB1は条里線であるが、形態的には明確でないいわゆる緩急線であり、時期は弥生時代以降とえられるもので、SR1とほぼ同じ向きを示した条里線もある。

この付近では、おごえ川の武ノ浦遺跡の集落で条里線の向きを認めることができるが、今期確認した道路状遺構のうち、条里線のうちと平行ではなく、ほぼ垂直りに約10°傾いていた。調査から同じした遺構は多くはないが、弥生時代のものと考えられる。

(続々)

〔註〕

- ① a. 駒田利治「位置と環境」『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う 松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993
- b. 中川 明「神戸遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 1999
- c. 水谷 豊「惣作遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 2002
- d. 米山浩之「一般国道23号中勢道路建設事業に伴う 位田遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 1999
- e. 中村光司「一般国道23号中勢道路建設事業に伴う 位田遺跡（第2次）発掘調査報告」津市教育委員会 2002
- f. 米山浩之・宮田勝功「一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う 蔵田遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 1999
- g. 川崎志乃「一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う 里前遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 2002
- ② 註①gに同じ
- ③ 池端清行・米山浩之・宮田勝功「武ノ坪遺跡」『一般国道23号 中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報X』三重県埋蔵文化財センター 1998
- ④ a. 池端清行・水橋公恵「替田遺跡（第1次）」『一般国道23号 中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報IX』三重県埋蔵文化財センター 1997
- b. 水橋公恵・筒井昭仁・西村美幸「替田遺跡（第2次）」『一般国道23号 中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報X』三重県埋蔵文化財センター 1998
- ⑤ 註①cに同じ
- ⑥ a. 註①bに同じ
- b. 柴山圭子「神戸遺跡（A地区）調査の結果」『神戸遺跡（第2次）・替田遺跡（第3次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2001
- ⑦ a. 註①dに同じ
- b. 註①eに同じ
- ⑧ 註①fに同じ
- ⑨ 米山浩之「蔵田遺跡」『三重県産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報』津市教育委員会 1993

- ⑩ 駒田利治・竹内英昭・増田安生・倉田直純・清水正明・小菅文裕・山口 格・本堂弘之・浅生悦生・中村光司・穂積裕昌・渡辺尚登「一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う 松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 1993
- ⑪ 伊藤久嗣・吉水康夫ほか「納所遺跡範囲確認調査報告」三重県文化財連盟 1976
- ⑫ a. 中村信裕「浄土寺南遺跡」『昭和55年度県営園場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981
- b. 早川裕己「浄土寺米買遺跡」『昭和56年度県営園場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982
- ⑬ 『津市四天王寺文書』平安遺文980号
- ⑭ 仲見秀雄「菟芸・安濃・一志郡の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』株式会社東京堂出版 1979
- ⑮ 岡田 登「伊勢国市村駅所在地考」『皇學館論叢』第13巻 第6号 1980年
- ⑯ 註①に同じ
- ⑰ 註①dに同じ
- ⑱ 「松山遺跡」『三重県埋蔵文化財年報』18 三重県教育委員会 1988
- ⑲ a. 平松令三監修「日本歴史地名大系」第24巻 三重県の地名 株式会社平凡社 1983
- b. 「三重県史」資料編 近世1 三重県 1993
- ⑳ a. 註①aに同じ
- b. 「三重県史」資料編 近世1 別冊 三重県 1993

註②bに同じ

註③aに同じ

註④aに同じ

写真図版



範囲確認坑 G19 (南から)



範囲確認 Aトレンチ溝 3・4 (南東から)



調査前風景 (南から)



調査区全景 (西上空から)

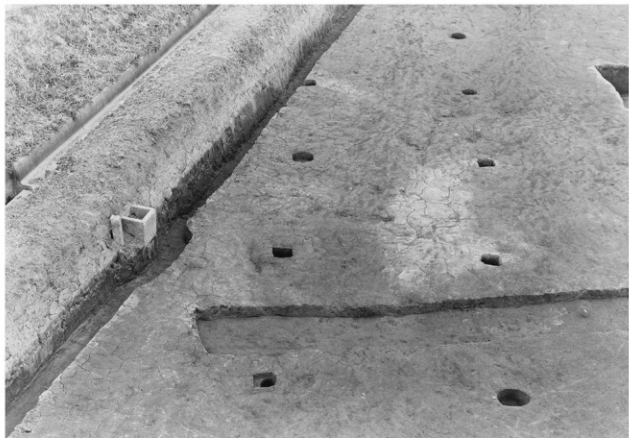


調査区全景（南から）



調査区全景（北から）

PL 4



SB1 (西から)



SB2 (西から)



SE1 (北東から)



SE1曲げ物 (北東から)

P L 6



SR1, SD2・3 (東から)



SR1, SD2・3 (西から)



SR1, SD2・3断ち割り (西から)



SD9 (南西から)

PL 8



SD11 (南から)



SK30 (西から)



SE1, SK6~10 (北から)



SK11~14・18~21 (西から)



農道南の調査区（南から）



調査風景



5



25



31



27



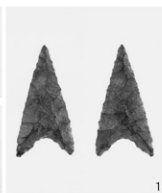
28



29



30



1

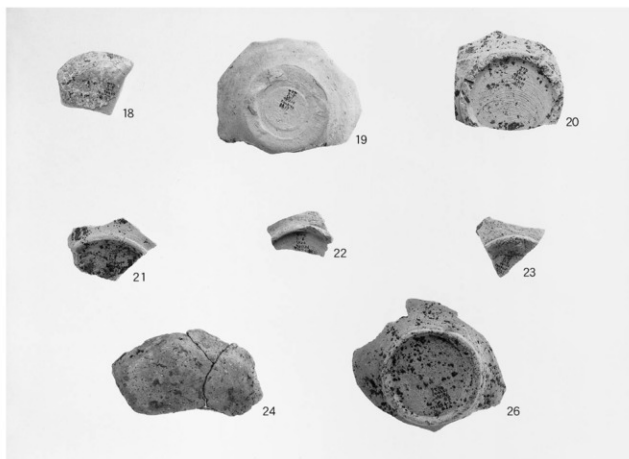
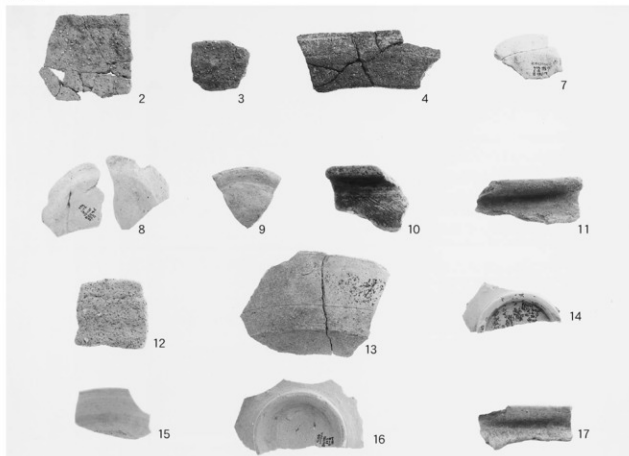


58

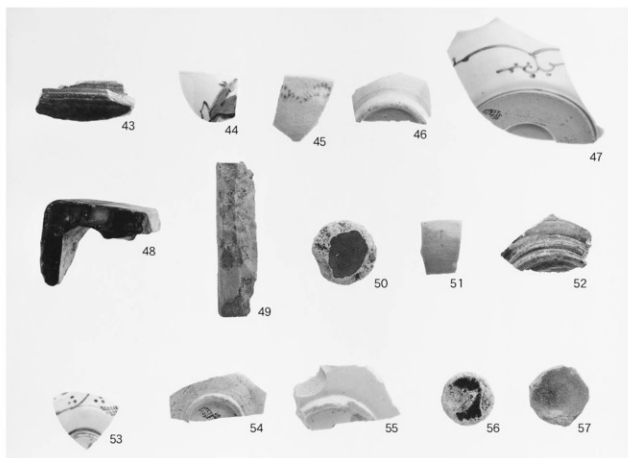
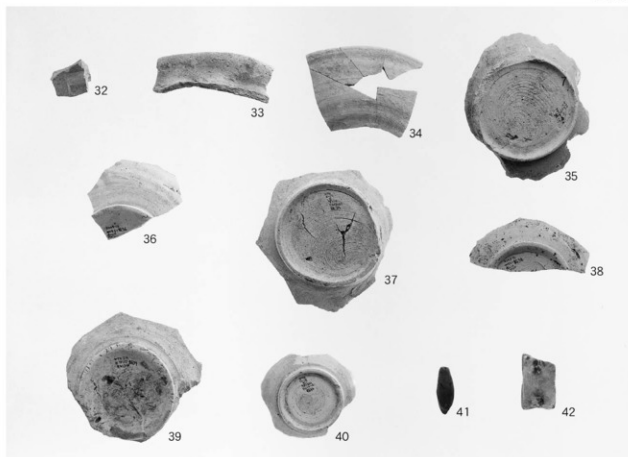


6

出土遺物



出土遺物



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やなせいせきはくつちょうさほうこく							
書名	梁瀬遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	115-21							
編者署名	川合圭子・河北秀実・本堂弘之・村木一弥・宮田勝功・米山浩之							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川 503 in 0596-52-1732							
発行年月日	西暦 2004 年 3 月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
やなせいせき 梁瀬遺跡	みえけんつしのだぎざかくり 三重県津市野田字高栗	201	848	34° 42' 47"	136° 28' 22"	19981116~ 19990128	3,620	一般国道中勢道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
梁瀬遺跡	集落跡・道 路跡	平安・鎌 倉時代	独立柱建物・井戸・溝・道路・ 土坑		土師器・山茶碗			

三重県埋蔵文化財調査報告 115-21

梁瀬遺跡発掘調査報告

2004. 3

編集 三重県埋蔵文化財センター
 発行
 印刷 千巻印刷産業株式会社